

「教師の仕事と4月までの課題」

この教育実践演習の授業をとおして、今まで私が教育実習や大学での授業をとおして知っていたものよりも、教師の仕事が、もっと幅広いものであるということを知ることができました。教師として、子どもにどのようなようになってほしいかという願いや子どもたち自身ののびたい思いをふまえた授業を考え、接し方や声かけを考え、日々の中で親とも実践していくということは、私が今まで感じていた教師の姿です。しかし、その姿だけではなく、学級経営におけるスローガン作りや学級通信、掲示、また保護者との連携の在り方、行事の運営など、知識としては知っていてもどんなものかぼんやりとしか浮かんでいなかったものが少し見えてきた気がします。ベテランの先生方や、すぐ上の年代の先生方から実際にお話を聞けたからこそ、つかめたものだと思います。また、特別支援教育においては、一人ひとりが多様なニーズがあると思います。保護者においてもそうです。その中で、子どもとうまく接していくには、親からの信頼や、親との連携はとても大切なものであるということに改めて強く感じました。親と玄関口で会った時などふとした瞬間の「〇〇くん、こんなことがうまくなりましたよ、がんばっていましたよ」という些細にも思える声かけが、保護者との信頼関係に結びつく一因であるというお話も聞いて、私も自然にそういった声かけのできる、小さな成長の喜びを分かち合える教師になりたいということを感じました。

以上から、まず私が4月までにやっていかななくてはならないこと、そして4月から本格的に始めなくてはならないこととして「わからないことが何かを知る」ということが挙げられます。教職1年目の先生方からの話の中で、「まずは、自分が何をわからないのかすらわからない」というお話があったのが印象的でした。わからないことがあったら聞く、というのは基本のことですが、聞くにはまず何を聞けばいいのか理解しなくてははいけません。そのためには、今のうちに、大学で教わったことや教員採用試験で勉強したことについて振り返り、どういったものか具体的に例を挙げられない、想像することができないというものを、挙げておきたいと思います。そうして意識しておくことで、実際に現場にでたときに、あのときわからなかったことはこういうことだったのか、という理解に結び付けられたらと思います。そういったことをしてもカバーできない分のことに関しては、先輩方に聞くことを必ずしたいなと思っています。20～60代の幅広い年齢の先生方がいる中で、私自身は教わる立場であること、しかし、責任もしっかりとをもって行動しなくてははいけない1人の教師であることを心におきながら、先生方との新しい関係づくりに励み、自分の中で子どもとかかわるうえでの肥やしにしていけたらと思っています。